月刊
通巻
644
2026年5月

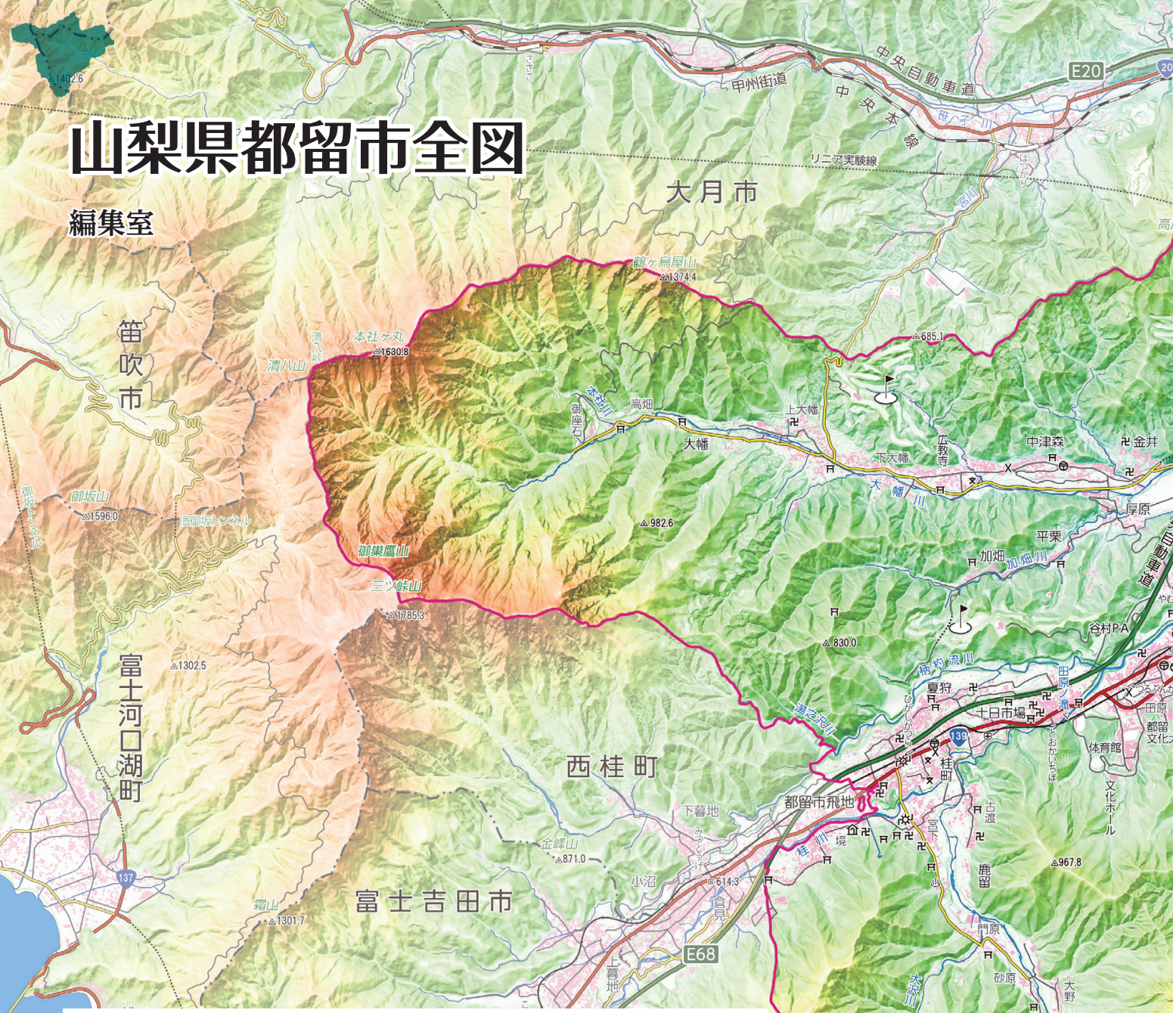
地図と学ぶ

地図中心

特集 都留市ー富士の湧水と渓流・富士の麓の小さな城下町ー

山梨県都留市全図

編集室



地図中心　644号 目次【特集　都留市－富士の湧水と渓流・富士の麓の小さな城下町－】		
山梨県都留市全図	編集室	2
都留市～富士の湧水と渓流・富士の麓の小さな城下町～	奈良　泰史	4
絵図から谷村城下読み解く	奈良　泰史	8
お茶壷道中－宇治・谷村・江戸を結ぶ“もうひとつの日本史”－	岩間　公勇	12
『甲斐国志』編さんに伴い作成された村絵図	奈良　泰史	16
京浜地域の近代化を支えた桂川流域の水力発電	奈良　泰史	20
馬車鉄道	佐藤　弘	24
古代田原郷の中心地から学園エリアに	小幡　哲明	28
富士の溶岩と湧水	小幡　哲明	32

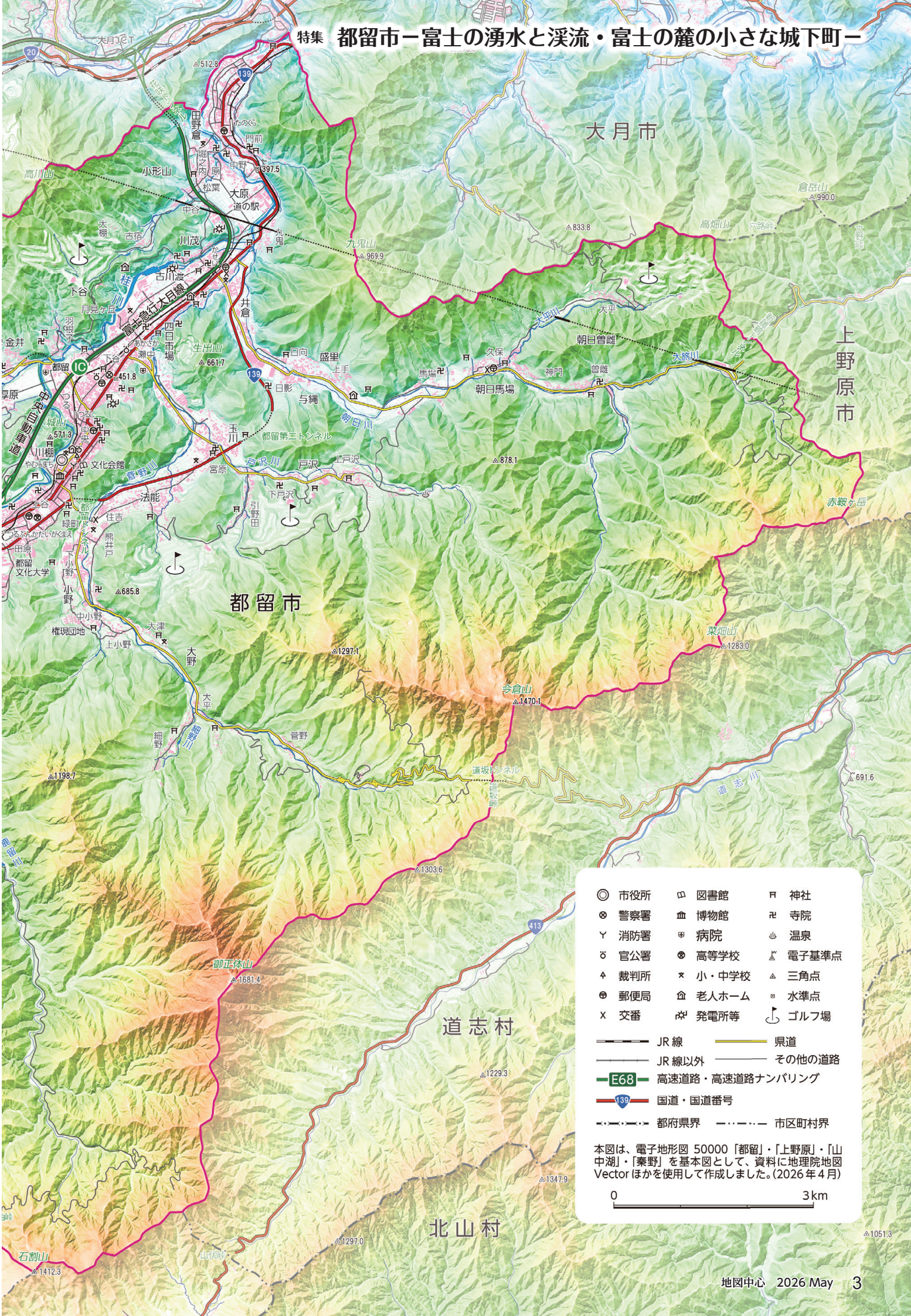
【連載】

《日本百名山が見える鉄道 見えた鉄道 28》富士急行線、中央本線から富士山	清水　長正	36
《地図づくり最前線 032》ユーザーからの投稿写真を地図更新に活用「ジオクエスト」(前編)	片岡　義明	38
《歴史舞台地図追跡 102》江戸・東京をめぐる虚像と実像 (其の卅陸)	谷口　榮	40
《地図を片手に大地を駆ける 96》アウトドア天国香港　後編	村越　真	42
《ベクター地歴地図孤軍奮闘記 69》生い立ちと切っ掛け 後編	小島　豊美	44
《地図心中 復活版 45》絵解き－42　まち歩きと「食」－1	高橋　美江	46
《地図教育の道具箱 42》手描き地図を活用して頭の中の地図をトレーニングする	栗山　絵理	48

新刊地形図案内　50　／今月新刊の見どころ！・日本地図センター便り　51　／編集後記・次号予告　52

《表紙》電子地形図20万「甲府」令和3年調製・「東京」令和2年調製（×1.2）・都留市位置図

特集　都留市ー富士の湧水と渓流・富士の麓の小さな城下町ー



都留市～富士の湧水と渓流・富士の麓の小さな城下町～

奈良（なら）　泰史（やすし）

市名の由来

市名は、古代律令制下に甲斐国に置かれた４郡（巨摩・山梨・八代・都留）のひとつ都留郡に由来する。

都留郡は山梨県富士・東部地域、いわゆる「郡内（ぐんない）」を郡域とする。明治時代以降は南都留郡・北都留郡に分割され、昭和 29 年（1954）に南都留郡下の谷村（やむら）町・東桂村・宝村・禾生（かせい）村・盛里村の１町４ヶ村が合併し、新市の誕生に伴い市名に採用された。

都留は、古くは「連葛」や「豆留」と表記され、図１のように、富士山の裾野が植物の蔓のように細長く伸びている様子から名付けられたという説をはじめ、鶴が多く棲息していたという説、古代朝鮮語の畑や平らな土地、または原野を意味する「つる」や、桂川の河岸段丘や支流の谷沿いに開けた地形から、川の流れを意味する「つる」が語源になったという説などがある。また、万葉集や和歌では「鶴」を連想し長寿の里として詠われた。

図２ 柄杓流川に注ぐ太郎滝・次郎滝

図３ 田原の滝

富士の湧水と渓流

都留市は、北側に御坂（みさか）山地、南側は丹沢山地に囲まれ、全体の約 84% が森林という山間の地である。また、市域には山中湖を源流とする桂川や、御坂山地や丹沢山地から流れ出す鹿留（ししどめ）川・柄杓流（ひしゃくながれ）川・大幡川・朝日川などの美しい渓流の風景が広がる。

桂川は数万年前には深い渓谷を刻んでいたが、約１万５千年前に富士山北東斜面の崩壊により発生し、桂川から相模川沿いに約 70km 流下したとされる「富士相模川泥流」によって渓谷は埋め尽くされ、さらに約 9,000 年前には富士山火口から大月市猿橋まで達した猿橋溶岩や、ほぼ同じ頃に都留市十日市場まで達した桂溶岩によって、現在の緩やかに傾斜した溶岩台地が形成された。

桂川や柄杓流川流域では、富士相模川泥流や猿橋・桂溶岩の露頭が観察でき、また、「太郎滝・次郎滝」（図２）や「田原の滝」（図３）などの溶岩崖から流下する迫力のある滝の絶景が楽しめる。

さらに、溶岩の間層から多量に流れ出す清冽な富士の湧水は、「十日市場・夏狩（なつがり）湧水群」として「平成の名水百選」に選定され、この湧水を利用した淡水魚の養殖や山葵・水かけ菜の栽培などが行われている。

図１ 植物の「つる」のように狭隘な平坦地が伸びる富士北麓

富士の麓の小さな城下町

都留市は富士吉田市と大月市の中間に位置し、JR 中央線の大月駅で下車し、富士急行線に乗車すると田野倉駅から東桂駅までの区間が市域である。これらのうち、都留市駅から谷村町駅の間が、富士の麓の小さな城下町「谷村（やむら）」のエリアである。

城下町「谷村」の礎は、寛永 10 年（1633）に谷村城主となった秋元泰朝（やすとも）によって築かれたが、宝永２年（1705）に秋元氏が川越に転封の後は天領になり、谷村城は破却され、家

図４ 城下町「谷村」

臣団の屋敷も取り壊され畑地に一変した。そのため、当時の姿は数種類伝わる絵図に残るのみであるが、絵図を片手にまちを歩くと往時が偲ばれるスポットに出会うことができる。城下町「谷村」の歴史を簡単に紹介する。

① 郡内小山田氏の拠点

城下町「谷村」の歴史は戦国時代に始まる。富士北麓の戦国時代の年代記である『勝山記』（『妙法寺記』）の享禄５年（1532）の条に「此年中、屋村へ御越候テ、新屋敷ヲ御立候」とあり、小山田（おやまだ）越中守信有によって「屋（谷）村」に居館が築かれたことが記され、初めて歴史の舞台に登場した。

その後、50 年余りにわたり郡内小山田氏の拠点となったが、天正 10 年（1582）に武田氏が滅亡し、その遺領を巡る徳川・後北条氏との抗争（天正壬午の乱）の際、北条氏忠が雑兵８千を連れて「谷村」に入ったことが『甲陽軍鑑』に記される。

② 後北条氏・徳川家康と対峙

天正壬午の乱の後、甲斐国は徳川家康の領地となり、「谷村」には都留郡領主となった鳥居元忠が入り、依然として強大な勢力を保持していた小田原の後北条氏に対峙した。

そして、後北条氏滅亡後の天正 18 年（1590）には、徳川家康が関東に移封され、家康に対峙するため甲斐国は豊臣氏の有力御家人が配された。文禄２年（1593）に浅野長政が領主になり、家老の浅野氏重が「谷村」を拠点に家康と対峙した。

③ 江戸城の西を守備

江戸に幕府が開設され、江戸城と甲府城の間にある「谷村」は、江戸城の西を守備する拠点となった。慶長６年（1601）には鳥居元忠の子・成次が谷村城に入り、成次の子・成行と二代 30 年間にわたり「谷村」に在城した。この間、甲府城代として、また、駿河大納言徳川忠長の付家老の任に当たるなどの重責を担った。

しかし、寛永９年（1632）、徳川忠長の改易に伴い、付家老であった成行は責任を問われて改易処分となり山形の鳥居忠恒（ただつね）に預けられた。

④ 秋元氏三代の城下町

鳥居氏改易後、寛永 10 年（1633）には、秋元泰朝が上州総社（現・群馬県前橋市）より谷村藩１万８千石の城主として入城し、絵図に描かれる城下町の整備が行われた。

秋元氏は泰朝・富朝（とみとも）・喬知（たかとも）の三代・72 年間谷村藩主を務めたが、この間、泰朝は日光東照宮の造営奉行として造営に尽力し、その功績として奥の院には「秋元但馬守藤原朝臣泰朝」の銘が入った狛犬が奉納されている。また孫の喬知は東照宮の改修の任を果たし、陽明門前に秋元喬知の名が入った金灯籠がある。

図５ 日光東照宮奥の院泰朝奉納の狛犬

図６ 陽明門前喬知奉納の金灯籠

日光は秋元氏と関係が深く日光山内 15 坊の一つ照尊院は、泰朝の戒名「照尊院殿道哲泰安大居士」に因むもので、現在も泰朝の遺髪塚を祀っている。

茶壷道中は、将軍御用の宇治茶を江戸まで運ぶ行事で、宇治茶を格納した茶壷は夏季の間、爽涼な「谷村」で保管されたが、秋元氏はこの任にも当たった。

図７の「谷村城下絵図」には、谷村城から内橋で結ばれる勝山城の

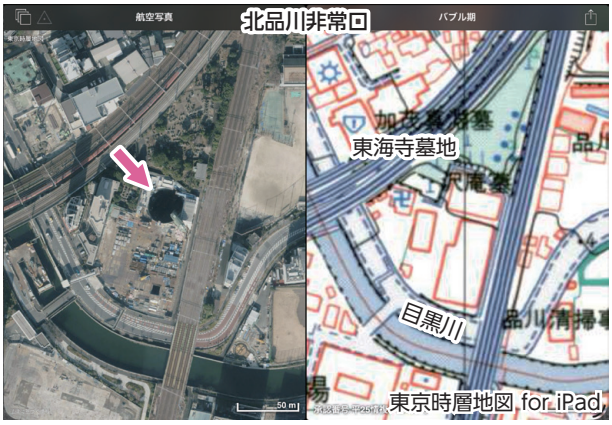
編集後記

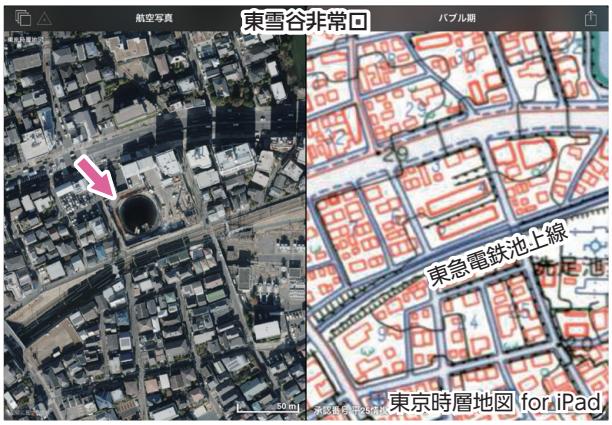
都留市には、1997（平成９）年に開設された山梨リニア実験線が走っています。この実験線は、リニア中央新幹線の実用路線の一部になります。2014（平成26）年、品川駅－名古屋駅間が起工され、工事が本格的に始まっています。

総延長の約86％がトンネル構造となるリニア中央新幹線の工事は、大深度地下を使用する区間が多く、工事を地表で見られる箇所は少なそうです。ただ、大深度地下のトンネルには、約５kmの間隔で非常口が設けられ、そこには立坑が掘られています。この非常口・立坑の工事は、空中写真に写っています。右図は、北品川非常口と東雪谷非常口の空中写真と地形図です。

北品川非常口は、深さ・約83m、直径・約30mの立坑です。これら立坑の最下部から、横方向にシールドマシンでトンネルを掘り進める工事が始まっています。立坑の大穴を空中写真で探してみてはいかがでしょうか？

（編集長・小林政能）





地理院地図（2026年４月取得）　参考：リニア中央新幹線（https://linear-chuo-shinkansen.jr-central.co.jp/plan/）

次号予告　2026年６月 通巻645号　毎月10日発行

地図と学ぶ 月刊
地図中心 特集 **踏切考察地図録**

鉄路と道路、異なる交通の動線が交わる踏切は、法令や構造に基づく仕組みを持ちながら、その場所の事情に合わせた様々な姿を見せます。本特集では、踏切の種別や設備に関する基礎知識をはじめ、都市部で進む立体交差化の現状、さらにユニークな立地や構造をもつ踏切などを取り上げます。踏切を通じて、地域の姿を見つめ直してみましょう。

バックナンバーのご案内　地図中心　検索

「地図倶楽部」へのご入会をお待ちしています！ 03-3485-5417（事務局）

地図中心
2026－5　通巻644号
発行　2026年５月10日
発行所 一般財団法人日本地図センター
〒153-8522
東京都目黒区青葉台4-9-6
電話　03-3485-8125
FAX　03-3485-5593
（月刊「地図中心」編集室）
メール　chushin@jmc.or.jp
URL　https://www.jmc.or.jp

©一般財団法人日本地図センター

定価　880円（税込）
印刷所　昭栄印刷株式会社

地図と学ぶ月刊誌

本誌の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転載することは、法律で認められた場合を除き、禁じられています。

地図中心 2026-5 通巻644号 令和8年5月10日発行（毎月1回10日発行）
発行 一般財団法人日本地図センター 定価880円（税込）

雑誌 86689-05
4912866890564
00800